

機関番号：72681
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520039
 研究課題名(和文) インド・チベット仏教の「心の宗教」としての伝統とその現代的意義に関する研究
 研究課題名(英文) A Study of the tradition of Indo-Tibetan Buddhism as 'Religion of Mind' and its value in the Modern World
 研究代表者
 吉村 均 (YOSHIMURA HITOSHI)
 財団法人東方研究会・研究員
 研究者番号：20280654

研究成果の概要(和文)：

チベット仏教各宗派はラムリム(菩提道次第)に基づき学習・実践をおこなうが、それはインドのナーガールジュナ(龍樹)による苦しみからの解放の方法としての仏教の体系化に基づくもので、無我とトンレン(自分の楽を与え他の苦を受け取る)の瞑想を核とするロジョン(心の訓練法)はそのエッセンスである。近年の欧米での仏教への関心はその実践性にあるが、上記の理解を踏まえて日本仏教の道元や親鸞の教えを読み直すことで、現代社会における可能性を探った。

研究成果の概要(英文)：

The origin of Lam Rim--practical steps of Tibetan Buddhism--is come from the thought of Indian Saint Nagarjuna. He understood Buddha's Words (Sutras) and systematized its as the way of free from sufferings. Lojong (Mind Training) of Tibetan Buddhism is the essence of these practices (accumulation of merit and wisdom for the cause of Form body and Wisdom Body of Buddha). Nowadays, Western people interest in Buddhism as the practice of mind, we reexamine the thoughts of Japanese Buddhism--e. g. Dogen and Shinran's thoughts--from above view point.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1000,000	300,000	1300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3000,000	900,000	3900,000

研究分野：倫理思想史、仏教学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学(2801)

キーワード：仏教学・宗教学・倫理思想史・菩提道次第・心の訓練法・ナーガールジュナ
・チベット・神仏習合

1. 研究開始当初の背景

日本の仏教学は他の諸学と同様、西洋の研

究を取り入れることから出発している。人の交流は今ほど容易ではなく、当時の西洋にお

ける研究は文献中心で、「対機説法」を特色とする、一神教や西洋の哲学とは大きく異なる仏教の性格は十分理解されていなかった。そのため、現在の日本の仏教理解は明治以前の伝統的なものとは大きく異なるものになっており、近年、欧米で近代化が生み出した諸問題、特に心の問題を解決する手がかりとして、仏教の実践性に関心が向けられるようになってきているのとは対象的である。

欧米で関心を持たれているチベット仏教の「心の宗教」としての性格をインド仏教に遡って明らかにし、そこから日本仏教を捉え直すことによって、現代社会における仏教の有効性について考える手がかりが得られると考えた。

2. 研究の目的

チベット仏教は、基本的には日本仏教と同じ、いわゆる大乘仏教の流れに属している。四大宗派—ニンマ・サキヤ・カギュー・ゲルグーは皆、仏教を輪廻の中の幸せを目指す者（下士）への教え（人天乗）・出離心を起こして輪廻からの解脱を目指す者（中士）への教え（小乗）・菩提心を起こして一切衆生を苦しみから解放するために仏陀の境地を目指す者（上士）への教え（大乘）に整理し、段階的に学習する、ラムリム（菩提道次第）の考えに基づいて実践している。これはインドから招かれたアティーシャが伝えた教えで、インドの大乘仏教の二系統—釈尊から文殊菩薩を通じてナーガールジュナ（龍樹）に伝えられた甚深なる見解の流れ・釈尊から弥勒菩薩を通じてアサンガ（無着）に伝えられた広大なる実践の流れ—を統合した教えとされている。このラムリムを支える論理を、インド仏教に遡って明らかにすると共に、ラムリムをチベットに伝えたアティーシャが密かに一人の弟子のみに伝えたとされるロジジョン（心の訓練法）の瞑想との関連を検討

することによって、苦しみからの解放の理論としての仏教のメカニズムを明らかにし、それを踏まえて日本仏教を読み直すことによって、日本仏教の現代社会における可能性を探る。

3. 研究の方法

(1)ラムリムおよびロジジョンの教えと、チベットの僧院教育で重視されている『中論』をはじめとするナーガールジュナ（龍樹）の諸著作、シャーンティデーヴァ『入菩薩行論』、弥勒『現觀莊嚴論』などとの関連を探る。実践階梯に関する研究であるため、文献に基づくだけでなく、実際にチベットの師から生きた伝統を学ぶことが必要不可欠であり、インドにおけるダライ・ラマ法王などの教えに参加するほか、ダライ・ラマをはじめとする高僧の来日時、および日本在住のチベットの高僧から積極的に教えを受け、不明点について尋ねる。

(2)その有効性について、心理学・医学の観点なども取り入れて検討する。

(3)上記の成果を踏まえ、道元や親鸞など、日本仏教の著作を読み直すことによって、仏教本来の枠組みから教えを捉え、近代的解釈の問題点を明らかにするとともに、現代社会における可能性を探る。

4. 研究成果

(1)仏教を三種類の人々への教えとして整理し、段階的に学んでいくラムリムの階梯が、インドのナーガールジュナ（龍樹）の仏教理解に基づくこと、それが大乘經典に基づいて新しい仏教を主張したというよりも、阿含經典の中の「主張を持たない」（『スッタ・ニパータ』など）ことに苦しみからの解放の核心を見、従来の理解（部派）を批判したもので

『六十頌如理論』、大乘經典についてはその苦しみからの解放の理論と矛盾せず、阿含經典に明示されていない部分を補完するものとして仏説と認めたものであること（『宝行王正論』）を明らかにした。ナーガールジュナによれば、無上正等覚者である仏陀となる因は有限なものではありえず、空性を理解する智慧と一切衆生に対する菩提心にに基づく利他行（智慧資糧・福德資糧）が仏陀の法身と色身の因となる（同前）。無我の瞑想とトンレン（自己の樂を与え他の苦を引き受ける瞑想）を核とするロジョンは、その実践のエッセンスである。これらの点について論文「ナーガールジュナ（龍樹）の実践的仏教理解・試論」、「チベットに伝わる心の訓練法（ロジョン）と現代」を公にした。後者では、主要テキストを翻訳、解説したほか、ロジョンが欧米で心のケアの方法として関心を持たれていることと、非仏教徒でも実践可能な形で紹介されているその具体的方法、ダライ・ラマ法王が科学者と継続的におこなっている心と生命会議の成果を踏まえ、瞑想の効果についての医学的検証、元々秘伝とされていた教えを現代人が実践する際の注意点についても紹介し、実践的なマニュアルとしても用いることができることを心がけた。

(2)一神教や西洋の哲学のようなものとして仏教思想を捉える近代的理解からは、神仏習合は仏教思想が崩れたものと見なされるが、「主張を持たず」相手に合わせた教え（対機説法）という伝統仏教の特質を考えるならば、在来の神の信仰に合わせて説かれるのはむしろ当然である。また、近代的理解ではキリスト教の宗教改革に重ねて民衆へ平易な教えを説いたと説明される道元や親鸞の教えは、段階的ではなく一気に核心部分へ到達する「頓悟」の教えであり、そのような無理な

ところのあるあり方が明治維新まで存続しえたのは、在来の神信仰がそれを支える階梯の部分の肩代わりしたからであることを、主として浄土信仰を題材に論じた。この点については全体的な見通しを『神と仏の倫理思想 日本仏教を読み直す』として刊行し、いくつかの書評（朝日新聞 2009年8月9日・週刊読書人 2009年9月25日・仏教タイムス 2009年12月10日など）で取り上げられ、反響を呼んだ。これについては補完するいくつかの論考を発表した。

(3)チベットでは、經典の内容を三転法輪説で分類し関連づけている。初転法輪は、阿含經典の、四聖諦（苦・集・滅・道）と止悪修善の教えを中心としている（ラムリムの下士と中士への教えに相当）。第二転法輪は、大乘經典の、般若經の空の教え。第三転法輪は、大乘經典の「光明の心」（如来藏。空を理解して二元論的把握から解放された境地）についての実践的な教えで、密教が含まれる。チベットではナーガールジュナの教えもこの三転法輪に対応するものとして理解されている。初転法輪に対する教誡聚（『勸誡王頌』『宝行王正論』など。後者は次の理論聚に位置づける説もある）・第二転法輪に対する理論聚（『中論』『空七十論』『廻諍論』『広破論』『六十頌如理論』『宝行王正論』あるいは断片のみ残る『言説の成就 (tha snyad grub pa)』を加え6つとする説もある）・第三転法輪に対する讚嘆聚（『法界讚』など）。この理解を踏まえることで、伝統的な教えと実践の相互関係を理解することができる。①たとえば『般若心經』は第二転法輪の教えだが、ここでは「五蘊皆空」など、五蘊・十二処・十八界・十二支縁起・四聖諦が空であることが説かれている。これらは阿含經典（初転法輪の教え）で弟子に対して説かれている教え（諸

法)で、五蘊・十二処・十八界は一切法(すべてのものがそこに含まれるカテゴリー)であり、私がいて私が捉えている通りの世界が実体としてあると考えて疑わない者に対して、あると信じて疑わない「私」がそのどこにあるか考えるよう説き、二元論的意識からの解放を促す。これらがいわば病気を治すための薬であるとするならば、『般若心経』は釈尊の悟りの境地を観自在菩薩(観音)が理解し舍利子に説明するという構成の経典で、治療が不要になった悟りの境地を表わすものとして位置づけられる。仏陀にとって世界は私たちのように二元論的に(自分と外の世界という図式で)捉えられるものではないが、その言葉で表わすことができない境地を段階的に体験する菩薩の階梯が、最後に「掲帝掲帝…」の真言で象徴的に示されている(インドからチベットに伝えられた解釈)。②ナーガールジュナの主著とされる『中論』が誰のために何を説いた教えかということも、この観点から解釈され、1章から17章までは、初転法輪で説かれた教え(諸法)を実体視している者に対してそれらが実体ではないことが説かれ、18章で「では真如とは？」と聞き返され、冒頭で私が五蘊か五蘊を離れた私があるか吟味することが説かれ(1偈)、そうやって理解した、「私」も「私のもの」も成り立たない、二元論的把握から解放された境地(これは言葉で示すことができず、自ら体験するほかないものであることが9偈で示されている)こそが解脱の境地に他ならないことが説かれている。③『華嚴経』は初転法輪の前、釈尊の悟りを描いた経典で、「普賢行願讃」ではそれが仏の毛穴ひとつひとつに仏の世界がある(=私と世界という二元論的図式を超えた)世界として讃えられ、そこに入る具体的な方法として阿弥陀仏の極楽浄土への往生が願われている。弟子を灌頂で曼

荼羅に引き入れ仏の世界を体験させる密教とともに浄土信仰は第三転法輪の実践として位置づけることができ、これは自己の教えを他力の頓悟とする親鸞の理解とも一致する。このような仏教理解は(1)と(2)の論をより密接に関連づけ得るものであるが、研究の最終年度で理解を得たため、それ以前に発表した論には反映されていない。この点は今後の課題となる。

(4)伝統的理解を否定し仏教思想の「教会からの解放」を主張したのは和辻哲郎だが(「沙門道元」ほか)、和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』は、個人が普遍を担いとうとする西洋の道德思想が一神教を背景としたもので、人が肉体を持つ時間的・空間的に限定された存在であることが捨象されてしまうこと、それが結果的に資本主義や帝国主義(アジア・アフリカの植民地化)という、他者を物、道具と見なす発想を生み出したことを問題視し、新たな「人間の学」としての倫理学を唱えたもので、一神教の神に代わる根拠づけとして仏教の「空」を持ってきている。しかし和辻は伝統的素養を持たず、その仏教への関心・研究は欧米の価値観に基づくもので(西洋美術を見る眼で仏像に美を見いだした『古寺巡礼』など)、むしろ和辻の問題関心には、上記のような階梯的仏教理解の方が合致するのであり、和辻の仏教理解の問題は、和辻倫理学の「人間」の陰影の乏しさ、事実上国家倫理学になっているといった、従来から指摘されている問題点につながっている。この第四の論点については、本研究期間において十分展開できなかったが、今後、第一・第二・第三の論点をさらに深めるなかで併せて論じていきたい。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ①吉村均、大乘とは？ 教えに基づく仏教入門 (その6)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 35、No. 1、2011、22 - 23
- ②吉村均、チベットに伝わる心の訓練法 (ロジョン) と現代、カルチュラル、査読有、Vol. 5、No. 1、2011、pp. 79 - 93
- ③吉村均、いかに幸せになるか—ダライ・ラマの教え 教えに基づく仏教入門 (その5)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 35、No. 1、2010、20 - 21
- ④吉村均、道元・親鸞が見たもの—仏教の心髄(下) 光明と空、大法輪、査読無、Vol. 77、No. 11、2010、pp. 164 - 169
- ⑤吉村均、道元・親鸞が見たもの—仏教の心髄(上) 面授と仏性、大法輪、査読無、Vol. 77、No. 10、2010、pp. 150 - 155
- ⑥吉村均、空の理解とその実践 教えに基づく仏教入門 (その4)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 34、No. 4、2010、23 - 24
- ⑦吉村均、ナーガールジュナ (龍樹) の仏教理解 教えに基づく仏教入門 (その3)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 34、No. 3、2010、26 - 27
- ⑧吉村均、チベットの諸宗派とその教え 教えに基づく仏教入門 (その2)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 34、No. 2、2010、24 - 25
- ⑨吉村均、ナーガールジュナ (龍樹) の実践的仏教理解・試論—チベットに伝えられた伝統から—、カルチュラル、査読有、4 巻 1 号、2010、137 - 148
<http://hdl.handle.net/10723/72>
- ⑩吉村均、「心の宗教」としての仏教 教えに基づく仏教入門 (その1)、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 34、No. 1、2010、19 - 20
- ⑪吉村均、福岡県仏教連合会のダライ・ラマ法王講演 第 24 回世界仏教徒会議日本大会—仏教界の現代社会への取り組み—、チベット文化研究会報、査読無、Vol. 33、No. 2、2009、6 - 9
- ⑫吉村均、老いの苦と仏教—東洋の伝統から—、倫理学年報、査読無、57、2008、19-34

[学会発表] (計 1 件)

- ①吉村均、老いの苦と仏教—東洋の伝統から—、日本倫理学会、2007 年 10 月 14 日、新潟大学

[図書] (計 2 件)

- ①峰島旭雄監修 (共著)、東京堂出版、浄土教の事典—法然・親鸞・一遍の世界、2011、

14 - 17、29 - 46

- ②吉村均、北樹出版、神と仏の倫理思想—日本仏教を読み直す、2009、248

[その他]

ホームページ等

吉村均、「近代の知」と「仏教の知」—何が見失われたのか—、中外日報 10 月 22 日、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村 均 (YOSHIMURA HITOSHI)

財団法人東方研究会・研究員

研究者番号：20280654

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：